

学位論文要旨

サハの口琴ホムス音楽の復興と再活性化

山下正美

本研究の目的と対象は、1980年代から本格化したサハ（旧称ヤクート）の口琴ホムス音楽の復興と再活性化のプロセスのなかで、中心的な役割を果たしたホムス奏者たちの諸活動を明らかにすることで、彼らが過去から現在へ何を引き継ぎ未来へ伝えていこうとしているのか、また彼らの諸活動がホムス音楽の伝承と伝播のしかけとして今日どのように機能しているのかを考察することである。本研究では次の4つの視座、すなわち①楽器学的研究、②北方民族音楽の研究、③チュルク語系民族音楽の研究、④専門的音楽文化（西洋音楽文化）の影響を念頭に置きながら、全7章から構成される。

第1章ではサハ共和国やサハ人の概要と共に、英雄叙事詩、サハ民謡、口琴ホムス以外の楽器について概説した。

第2章は、口琴ホムスの楽器学的研究で、MHS式楽器分類法およびM. N. ジルコフ、ユリー・シェイキン、ヴァレンティナ・スズケイら現地研究者たちの楽器研究を参照し、多様な楽器解釈のあり方を示した。本章の後半では、A. E. クラコフスキー（1877-1926）の詩「ホムス」（1898）の全訳を通して、サハ人のホムス観を（1）創造主が造った楽器、（2）ホムスの「小鳥 chyychaakh」、（3）話すようなホムス、（4）癒す楽器の4つに集約・整理した。

第3章では、ホムスを弾く人々やホムス奏者たちに焦点をあてた。ロシア革命前は主として女性が家庭で演奏する楽器であったホムスは、ソヴィエト時代に始まったアマチュア音楽活動 samodeiatel'nost'によって、コンクールやフェスティバルといったステージ上で演奏される楽器へと変容し、ここから著名なホムス奏者たちが輩出された。そのようなホムス奏者の1人イヴァン・アレクセイエフの働きかけにより、1990年11月30日に開館した世界民族口琴博物館は国際口琴センターを併設し、今日では口琴関係の諸資料が集積し保管される国際的拠点となっている。またサハの口琴ホムスに関するあらゆる情報の伝承・伝播のしかけとして機能していることを明らかにした。

第4章では、ホムスの音楽とその演奏技法に焦点をあてている。ホムス奏者のスピリドン・シシーギンによる演奏例《ツンドラ》《トナカイ飼育民の歌》の楽曲分析を通して、この2曲の同一の民謡《ヘージェ》の旋律が用いられており、また録音年によって楽曲構成に複雑化が認められることを明らかにした。また、イヴァン・アレクセイエフやスピリドン・シシーギンによるホムス演奏技法の説明を通して、口腔内の使い方や楽曲構成の着想、学習プログラム、練習方法等について明らかにした。

第5章と第6章の主たる関心は、視座④専門的音楽文化（西洋音楽文化）の影響である。第5章ではサハ・ヤクート音楽史における専門的音楽文化の建設について取り上げ、その考察の枠組みや時代区分を明らかにした。また、この過程で決定的な役割を果たした「ヤクートで初めての専門的作曲家」M. N. ジルコフの出自や経歴を、当時のヤクーチアの社会状況とあわせて考察し、2012年11月15日に行われたジルコフ生誕120周年記念報告会への参加を通して、ジルコフが古参ロシア人の1人として好意的に受け入れられていることを明らかにした。

第6章では、ジルコフの代表的著書『ヤクート民俗音楽 *Iakutskaia narodnaia muzyka*』(1981)を取り上げ、ジルコフによるサハ民謡・楽器研究の背景とその内容を明らかにしている。特にジルコフの提案したホムスの3つの改良案を「ステージ上で調性的な音楽を集団で演奏する」ことに集約し、これもホムス音楽復興のもう一つの可能性として今日の演奏実践への関わり方を考察した。

第7章では、2011年6月にヤクーツク市で行われた第7回国際口琴大会と夏至祭りウスィアフへの参加を通して、今日のホムスとその音楽のあり方を考察した。本大会は、専門的音楽文化の中心地として建設されたオペラ・バレエ劇場をメイン会場として行われ、またサハの一年でもっとも盛大に祝われる夏至祭りウスィアフとの同時開催というかたちをとった。また「世界一大きな^{ホムス}口琴アンサンブルへの挑戦」というギネス記録への挑戦では、1344人のホムス奏者がサハの民俗舞踊オフオカイの旋律を同時に演奏し、ギネス記録が達成された。このような大規模アンサンブル実現の背景には、ホムス音楽の復興と再活性化のための諸活動があり、本研究ではこれを主導したホムス奏者たちの諸活動の蓄積が今日も伝承と伝播のしかけとして有効に機能していると結論づけた。